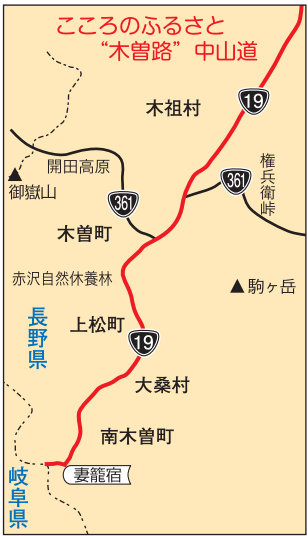


「木曾路はすべて山の中である」
島崎藤村は大作「夜明け前」を、
こう書き出した。舞台となった幕
末の激動から百数十年。国道19号
は立派に整備され、伊那谷から権
兵衛峠を越えて木曾谷を横断し、
飛騨まで結ぶ国道361号も整備が進



む。しかし、山深く残された豊か
な自然、そして中山道の名残を色
濃く残す宿場町と温かな人情、木
曾路は、今も人々をひきつける。
日本風景街道「こころのふるさと」
木曾路、中山道を訪ねた。

寧に復元する活動を続け
ている。繭玉つくり、お
雛さま、花祭りなどな
ど。しだいに増えてきた
外国からのお客さんに対
応できるようにと、外国
語の習得も始めた。最初
の1年間は英語。このあ
り、中国語、そして韓国
語まで勉強会をひらく予
定だ。「おかみさんの力
で地域を盛り上げよう
と。それも、みんなで楽
しみながらなんですよ」
と会計担当の鈴木八重子
さん(50)は語る。

自然休養林」がある。20年
に1度の伊勢神宮式年遷
宮の際に、御用材を切り
出すために守られてきた
深い森。樹齢3000年を
超える樹林は、森林浴の
場として親しまれ、最近
は、森林セラピーの拠点
としても注目されてい
る。この貴重な森を守る
活動をしているのが、N
PO法人「木曾ひのきの
森林管理署と協力の
して下草刈りなどの森の
保全活動や、訪問客への
ガイド役などを果たして
いる。理事長の横井剛さ
ん(74)は「この森をどう
再訪客を増やしている。
食事にエビやマグロは
出さない。その日とれた
何種類もの山菜やヤマメ
のフルコースが基本だ。
連泊の人以外には肉も出
さない。ヤマメはしゃぶ
しゃぶ、ぬた和え、蒲焼、
てんぷら、フライなどに
調理する。天然ものは入
手しきれないので養殖も
のを使うが、清水の池で
2週間くらい飼ひ、臭み
を抜いて、調理直前の午
後4時に絞めるという凝
りようだ。食器は弟さん
の窯を借りて自分で焼
く。その手作りの味わい
も人気だ。

癒やしの山と温もる情と

木曾街道11宿の南の玄
関が藤村の馬籠宿。いま
最も知られているのは隣
の妻籠宿だ。電柱も電線
もテレビアンテナもない
宿場の町並みは、簡素な
美しさに満ちている。本
当に江戸時代にタイムス
リップしたような気持ち
にさせてくれる。
旧妻籠村(現南木曾町
妻籠)は、開発から取り
残されたがゆえに残って
いた町並みを生かし、昭
和40年代から「妻籠宿ブ
ーム」を起した。その
立役者が小林俊彦さん
(80)だ。



小林俊彦さん



鈴木八重子さん



春の開業に備えて「冬ごもり」の若宮夫妻



妻籠宿のにぎわい



ヒノキの巨木の間を歩く遊歩道

日本風景街道 一輝く人たち

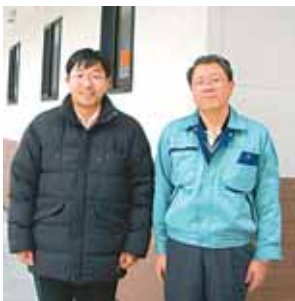
8

昭和50年代のピーク時
は年間百万人の観光客が
押し寄せた。いったん役
員を返っていた小林さん
だが、宿場で商いをする
人たちと一般住民の間の
微妙なズレを感じはじめ
、「理と利のバランス
を取り戻さなくては」
と、3年前に理事長に就
任した。

いま、妻籠宿では、お
かみさんたちのグループ
「やまぶきの会」(伊藤
君江会長、約40人)を中
心に、お客さまにも喜ん
でもらえる民俗行事を丁
度よく美しい。
旧開田村(現木曾町開
田)は早くから景観保護
の大切さに目覚め、伝統
的建造物の保存や、新築
にも伝統建築様式を取り
入れるなどの努力を重ね
てきた。



開田高原木曾馬の里からの御嶽も美しい



大目富美雄さん

▲ 操業をはじめた「おんたけ有機
合同」加工工場の前で、上田清
社長(右)と松井淳一顧問

実業家で中軸になって
いるのは、Jターン組の
松井淳一さん(54)だ。35
億円でまで育て上げた。
歳のととき外資系企業をや
めて木曾福島に戻り、開
田村でペンションを始め
た。「開田高原アイスク
リーム」を興し、年商1
億円にまで育て上げた。
場を昨年建設、最初に、
とうもろこしゴーフレッ
トの生産をはじめた。コ
ーンスूप、豆腐、納豆、
味の白菜、そはに加え
て、さまざまな農産物を
つくり、それを加工して
付加価値をつけ、ファーマーズマーケットを造っ
て売る。
「卒業した子供たちが、
残りたいと思うふるさと
を作らなくては。生き生
地は借りあげたり、高齢
化した農家にはサポート
隊を出したりして荒れた
農地をなくす。そういう
自信がみなぎっていた。

リード役の一人が、木